

編集後記

2021年度広島国際大学基盤教育センター紀要第六号を上梓する。2016年度の創刊以来「総合教育センター紀要」の編集・発行の主体であった本学「総合教育センター」が改組、2021年度より新たに「基盤教育センター」が発足、この改組に伴い本紀要も「基盤教育センター紀要」に改題。今後も、学術教育の振興になにほどこ資する紀要であることを願う。

本年度もデルタ株、オミクロン株（5月31日、WHOがギリシャ文字を用いた変異株の命名方針を公表）といった新株の発生、第一波から第五波にわたる感染拡大・収束の繰り返しと新型コロナに翻弄された日々ではあった。「密閉」・「密集」・「密接」いわゆる「三密」の回避、マスク着用、手洗い（手指消毒）・うがいの励行といった対策が広く共有され、感染予防に留意しつつ日常生活の充実が模索されるなかで、本学においても感染の推移に応じつつ、予防対策を徹底した上での「対面授業」の積極的再開等、新型コロナ下における大学生生活充実のための試みがなされた。

※国立大学の学生の自殺率（10万人当たりの自殺者数）が2020年度に過去6年間で最多になったとの報告もある（茨城大学保健管理センター調査）。大学における学生生活の充実を図ること、その責任が大学人に問われている。

年明け、1月下旬以降の広島県内における新規感染者数の減少、いわゆる「第3波」の収束（2月下旬以降、広島県では新規感染確認者数ひとケタ台が継続、新規確認者が1人、2人の日も珍しくなかった。）を受けて3月16日に「広島国際大学指針行動レベル」が「レベル1」（「感染への注意が必要な状態」）に引き下げられ、「対面授業」の積極的再開が勧められる状況での「基盤教育センター」発足。新体制のもと、何はともあれ前向きに清新な気持ちで教学に取り組むことを私自身心がけはしたが、やはり新型コロナは予断を許さない。皮肉にも「レベル1」引き下げ以降、広島県内の新規感染確認者数は徐々に増加、4月下旬には「第4波」到来が明らかとなった。同月30日付で本学の行動指針レベルが暫定的に「レベル2」（「大人数での行事、イベント等について自粛要請が出ている状態」）相当の扱いに。感染拡大は止まらず、本学行動指針も5月12日「レベル3」（「緊急事態宣言は発出されていないが、外出の自粛などの要請がでている状態」。同日「オンライン」活用の積極的推進等を反映した改正「行動指針」の発表。）、同16日には広島県での「緊急事態宣言」発出を受けて「行動指針」が「レベル4」（「緊急事態宣言が発出されている状態」）、6月20日の広島県「緊急事態宣言」解除まで同レベルが継続された。解除を受けて同21日には「レベル3」に引き下げ、7月12日には「レベル1」となった。小康状態もつかのま、7月12日東京都「緊急事態宣言」発出の頃から、広島県でも新規感染者が微増し始めた。8月20日の広島県「まん延防止等重点措置」適用を受けて、同日「レベル3」への引き上げ。同27日には広島県「緊急事態宣言」発出、それに応じて本学「行動指針」も「レベル4」に引き上げ。当初、「緊急事態宣言」期間は8月27日から9月12日までの予定であったが、感染収束の兆しは見えず、9月9日に同30日までの期間延長決定、9月30日の「緊急事態宣言」解除をもって10月1日より本学行動指針が「レベル1」に引き下げ、といった顧みてあわだたしい推移ではあった（広島県は9月30日の「緊急事態宣言」

終了後も10月1日～14日を「集中対策期間」とし、重点区域（広島市、東広島市、府中町、海田町）においては特に飲食店に対し営業時間短縮が要請された。以降、2021年内は新規感染者数も抑えられていたが、年末年始の人流増加、新たに検出された「オミクロン株」（11月26日WHO命名）によるものか、年明けより感染拡大の兆候が見られ、1月5日に大学から本学「行動指針」を7日から当面の間「レベル3」に引き上げる旨の連絡、本稿を書いている1月6日には広島県による「重点措置」適用申請のニュースが飛び込んできた。同日の県内新規感染確認者数273人、急激な拡大である。オミクロン株については、WHO責任者等より「重症化リスクは低い」旨の見解が示されているが、油断は禁物であろう。WHOテドロス事務局長とともに、2022年における新型コロナパンデミックの終息を期待したい。※感染（確認）者数の推移についてはNHK特設サイト「新型コロナウイルス「広島県の新型コロナデータ」等を参照した。

新型コロナに右往左往する中で、悲しい別れがあった。本学総合教育センター副センター長、センター長を歴任し、「共通教育」カリキュラムの編成、時間割作成といった教学運営の中核的業務の責任者として、また、インターネットによる学修支援・教育基盤システムであるCourse Powerの導入（新型コロナ状況にあつてこのシステムは大いに活用された。）等々、本学における教学体制の充実に文字通り日々貢献、尽力、基盤教育センター発足についても中心的な役割を果たされた向田一郎初代基盤教育センター長（保健医療学部診療放射線学科 教授）の突然の逝去。10月28日早朝のことであった。教授の学問的業績について論じる資格を持たないが、個人的なことと言えば、とある集まりにて最後にお会いしたのが10月23日。アクリル板設置、社会的距離確保といった条件のもとではあつたが新型コロナ状況において貴重な対面の時間。その合間に詳細は省くが他愛ないと言えば他愛ない主題について、しかし、こちらとしてははなはだ勉強になった文理横断の学問談義のひとつきを持つことができた。わきまえた方の説明というのは素人にもわかりやすいもので、こちらの勝手な質問にも快く応じてくださり、短くも楽しい時間、終始ニコニコと話される向田教授の笑顔も今にして思えば印象的であった。あれが最後の別れとなるとは。

メールを見返すと向田教授との最後のやり取りは、これまた教授がその充実に尽力した、本学初年次教育の一環である「アカデミックリテラシー」に関するもの。オンデマンド形式の授業になかなか適応できず、前期前半（「アカデミックリテラシー」はクォーター制。今年度当初は、対面授業を実施したが感染が再拡大、やむなくオンデマンド形式に切り替えられることとなった。）に単位修得に至らなかった学生に対する個別の補講修了の報告であった。（向田教授は「科学リテラシー」、私は「日本語リテラシー」を担当。）10月20日に補講が一通り終わった旨のメールが届き、その後、電話にて再確認、年度内に何とか学生が単位修得できたことを喜んだ記憶がある。

「総合教育センター紀要」の創刊、その継続にあつても、終始、尽力、ご支援をいただいた。思えば、広い視野に立って、絶妙のバランス感覚を持ちつつ、本学の教学体制の充実発展に力を尽くされた方であった。個人的な思い出は尽きないが、この「基盤教育センター紀要」の充実を含め、本学の教学、「基盤教育」充実をはかることが、故人の遺志に沿うものであると信じたい。

向田一郎教授のご冥福をお祈りします。

村上智章 基盤教育センター紀要編集委員長